

セガン（一八二二〜一八八〇年）は、「子どもを、筋肉組織の教育から神経組織の教育へ、感覚へ、感覚教育から概念へ、概念から観念へ、観念から道徳性へと導く」<sup>i</sup>道筋を構想し実践しました。

特徴的なのは、「概念」と「観念」を区別し<sup>ii</sup>、「感覚から観念へ」と考えるロックやコンディヤック、そして師のイタールを批判・否定して、間に「概念」を入れた点です。

そしてその概念は、感覚によってつくられるとしました。あわせて「すべての感覚は触覚の変形である」<sup>iii</sup>との立場なので、概念は感覚によって生々しくつくられるものでした<sup>iv</sup>。

「一、概念は感覚を介して得られる。  
二、観念は帰納と演繹によってもっぱら知的な活動を獲得する。……私は、この二つの命題からすべての子どもの教育は、感覚によって知覚しう



るすべての現象を理解する概念で始まるべきである、との結論を導いた」<sup>v</sup>

とあり、その概念と観念を比較したり関連づけたりすることで観念を生みだすとしました<sup>vi</sup>。

ルソーは、その観念を生む力は、内なる力であり、能動的な力であるとし、それを知性と考えていました（ロックらと対立）。セガンはルソーのこの考えをまっすぐ継承し、そのような知性が発動するためにこそ、感覚による概念を得ることが重要だと考え、実践しました。セガンも生活教育の先駆者ともみるべきでしょう。

（研究部・加藤聡一）

参考文献

- ① エドワード・セガン（川口幸宏訳）『初稿 知的障害教育論 痴の衛生と教育（一八四三年論文）』幻戯書房、二〇一六年。i 十八、ii 百九、iii 四十七、iv 百十、v 百十三、vi 百十ページ。
- ② ルソー（今野一雄訳）『エミール（中）』岩波文庫、岩波書店、改版二〇〇七年、原著一七六二年、一八八〜一八九ページ。